

無意識から意識へ

——四則演算で導かれる自己



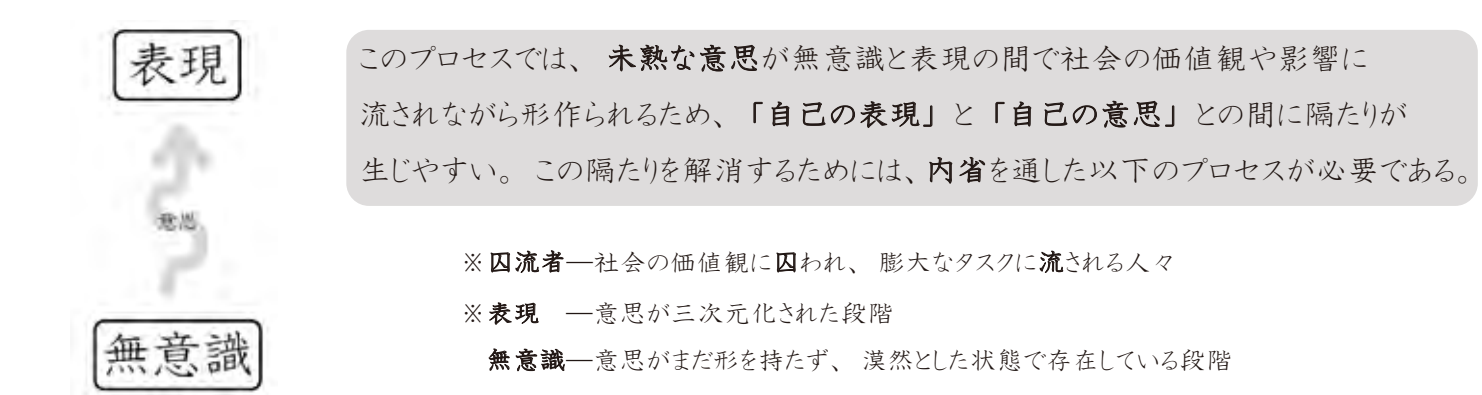
00. 建築の提示

本提案では、自分自身と向き合い、自分の在り方を見つめ直すための地下空間を設計する。

01. コンセプト

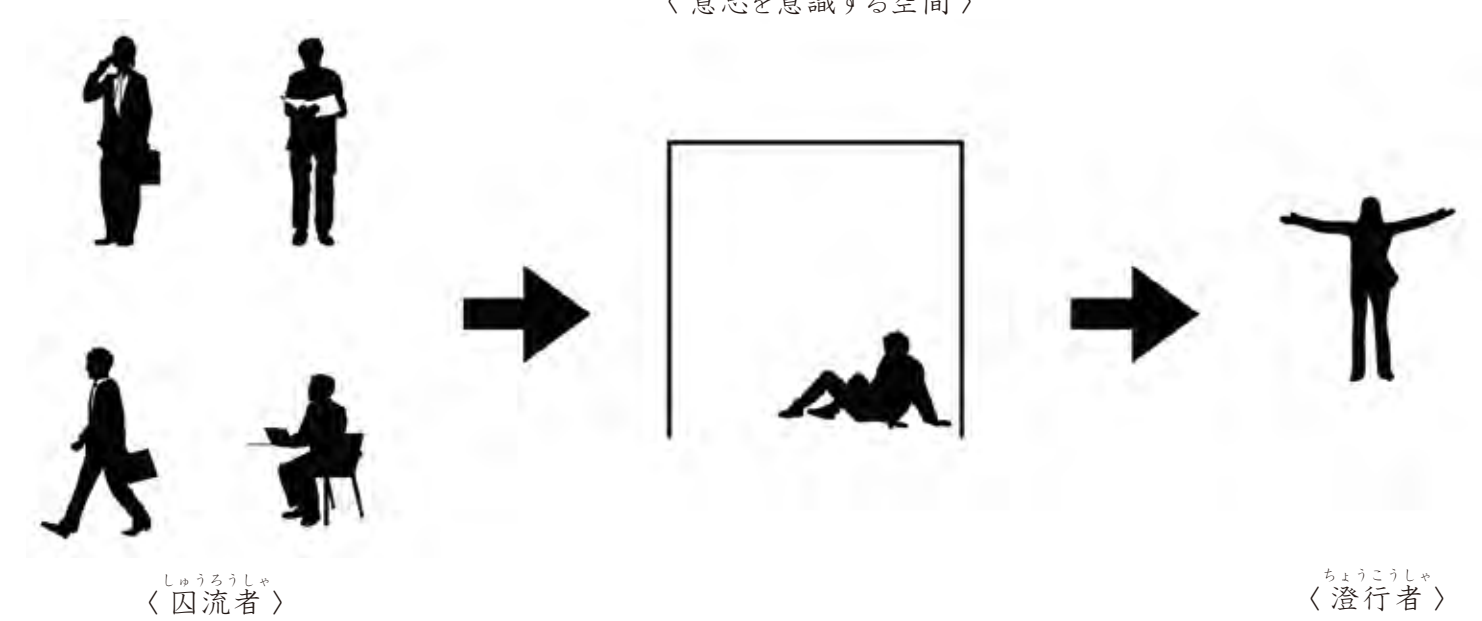
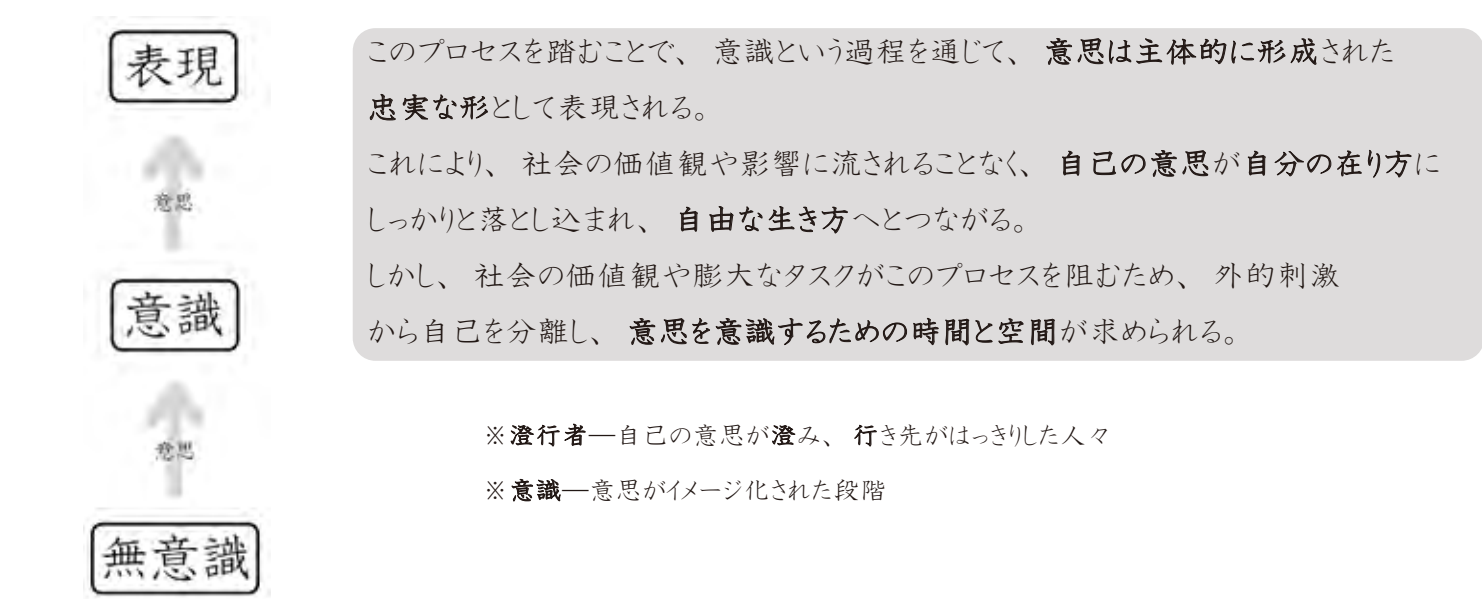
現代は「自分の在り方が揺らいでいる時代」である。
近代以降、自由に生きるための条件は整えられてきた。しかし、社会の価値観により、自己の意思が意図せず変形し、「自己の表現」と「自己の意思」との間に隔たりが生じやすい。また、社会の課す膨大なタスクがそのズレを隠すかの如く、私たちを追いかける。

〈囚流者の意思の動き〉



この隔たりを解消するためには、内省を通した以下のプロセスが必要である。

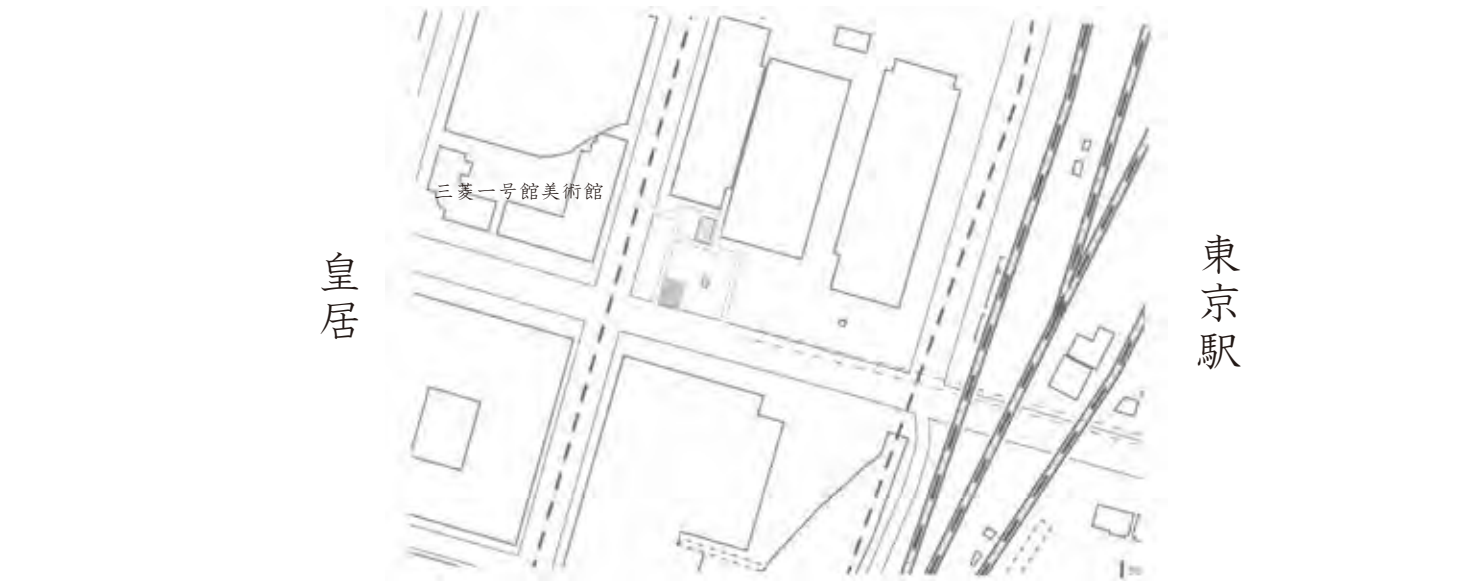
〈澄行者の意思の動き〉



外的刺激が取り込みやすくなる未来の社会において、
自分の在り方を見出すための建築を、私たちは次の時代へ提案する。

02. 敷地

敷地は東京駅周辺の丸の内ビル街の一角。



首都東京の真ん中にあるこの場所には、多くの囚流者が存在する。

03. 四則演算の可能性

このプロセスを建築に落とし込むために、四則演算の手法を適用し、空間設計を行う。四則演算を手法とし、空間を整理することで、三次元上で精神的な体験を生み出すことを可能にする。

「÷」—空間の分割による内省への誘導

空間の分割は、外部から内部への移行を生み出し、単なる物理的变化に留まらず、精神的な変容をも促す。この段階的な変化により、人々は自然と内省へと導かれる。

「－」—削ぎ落としによる意思の具現化

不要な要素が削ぎ落とされた空間は、思考を洗練し、自己に対する本質的な問いを明確にする。この過程は、意思が「無意識→意識→表現」という段階を踏むために必要な要素となる。

「＋」—空間の拡張による意思の解放

自分の在り方を見出すために、外的刺激が遮断された空間を設計する。その中で、部分的に外部空間との連続性を持たせることによって、内部空間が拡がり、解放感が生まれる。この拡張は物理的な広がりにとどまらず、心理的な余裕をもたらし、精神的な広がりへとつながる。内面的な視野が広がることで、自己の意思をより忠実に具現化することを可能にする。

「×」—茶室の概念と建築の融合

伝統的な茶室の空間設計は四則演算の手法と非常に相性が良い。茶室では、四則演算を用いた空間の調和によって、訪れる人々が自然とお茶と向き合う場が創り出される。この空間アプローチを建築に融合させることで、調和の取れた空間が生み出され、人々が自己と向き合いながら、意思の変容へと導かれる空間が実現する。

